

## 上代葬儀の精神じょうだい

神道の葬式についての話ですが、これは以前神道本局で話したことがあるので、その復習になるだろうと思います。実の処は、もつと用意した話を申し上げたのですが、とうとうその暇がなかったので、ぶっつけに話さして頂くより為方しかたがありません。

今日の神道では、葬式の正しい扱い方はほとんどわかりません。これについては、我々の先輩たちから、皆頭を悩まして来られたのですが、誰に聞いても本道に徹底した御意見を承ることが出来ません。したがって私も同様、徹底しては申し上げられませんことを、どうぞ御含みおき願います。

一体、葬式ということとは、あつたかどうか、ということから、まず申さねばなりません。私の考えでは恐らく古代は、葬式といった特別の式はなかったので、結局わからないのだろうと思います。で、その立場から話して行くことになるのですが、私、神道に関係があると言っ

ても、本道は傍観者のような立場にいたので、今までに聞いていたこと、見たことについては、記憶違いをしているかも知れませんから、間違っていれば直して頂きたいと思います。

官社の職員が葬式にあずかれないで、民社のものがあずかるということはちよつと考えた所は不合理のようで、また何の根拠もない一片の事大主義に過ぎないというふうに見えますが、しかし何か深い根拠があつて、そうさせられたのかも知れません。だが、私にはその理由がわかりません。けれども、もう少し考えて見ると、葬式に対して官社の人と民社の人との関係が違い、今日そういうふうにせられているのが本道はいいのだ、という考えも成り立つように思われます。だから、昔の先輩たちが、何かの根拠があつてそうなさつたのかも知れませんが、

一体、死ぬということは神道ではどう扱つて来たか、死は現実にはあることだが、神道の扱ひ方の上では、それはなかつたので、つまり死は、生き返るところの手段と考えられていたらしいのです。つまり、日本の古代信仰は、死ぬものは生き返つて来なければならぬと考えているから、本道の死ということはないわけです。たとい、語源の解剖をした所で、それはある語のわからない時にその語の意味を知るだけのことで、徹底して総てが、語源通り行われて来たわけではありません。

万葉その外にある、しぬといふことは、しぬぶ——人を恋慕つたりするしぬぶという語の語源になつているしぬと同じ語だと思ひます。それが、副詞になるとしぬに、「汝が鳴けば、

心も思怒シヌに古へ思ほ（平）ゆ」というふうには、心が撓シヤつている状態をいうので、くたくたになつてしまつて疲れている、氣力がもうなくなつてしまふ状態が、しぬにシヌです。そして、そのしぬといふ音を含んだ語は、沢山あり、それが、悉トクく、意味が通じているように思われます。心の底で思つてゐること、そして、そのためにあんまり心が疲れているというようなことらしいのです。あるいはその心から反射して、肉体も疲れているというふうにも考えられるのです。これは字にして現さなくてはなりません、さらにshinシヌといふのは働かない部分です。しぬぶとかしぬにシヌとか、あるいはしなふなどの語になつております。ぬシヌといふには、語根として、shinシヌといふ働かない語が入つています。ところが、母音nシヌがつかますと、今度は完全にしぬといふ語になります。そうしますと、しぬといふ語になるのは、我々はしぬといふことは、はつきり我々が考えてゐることを、しぬといふ状態を目に浮べますから、今申しましたshinシヌといふ語根に母音がついて、しぬといふ動詞が出来たといふことは、納得出来ないのですけれども、元を考へて見ると、くたくたになつて元氣がなくなつてしまふ状態だつたと思う。これは文字で表しても現れにくいのです。

shinシヌなる語根は、くたくたになつてゐるという意味から、段々展開して来たものだと思つております。つまり、日本人がしぬといふ語を明瞭に意識して来始めたから、しぬといふことの内容が増して来たのだと信じております。たとへて見れば、葬式の初めだと申している――

否定する人も沢山あります——天、あめ いわやど岩屋戸あまらすおのみかみに天照大神がお隠れになった神話は、これが葬式であるかないかは、もちろん問題になるのだが、私はそれは本道は問題にならないと思っております。つまり、天照大神があまり急にお驚きになって、魂が遊離してしまっただと考えられるのです。この状態を神典では、いむはたどの斎服殿はたで機を織っておられた所が、すきのおのみこと素盞鳴尊あまが天の斑駒ふちこまの皮を剥いで放り込まれた、そのためにわかひるめのみこと稚日女尊が気を失ってしまったというふうを書いておりません。

おわひるめのみこと(注2)大日女尊と稚日女尊は区別がありますが、また同時に、神道の考え方では一緒に見ることも出来ます。これを合理的に申しますと、大日女尊というのは恐れ多いから、稚日女尊というものを考えて来たということを言えば普通通りますが、私は常に合理的な説明は避けています。その場合、大日女尊と稚日女尊とは一つに考えていたのです。つまり、おほ何々というのは、神職でも巫女でも正式のもので、それに脇に候補者としてついてあるもの、あるいは代理としてついているものをわか何々というたのだから、これは、ほかの語をもつてしてもえ・おとなどがあるように、そういう表し方はいろいろに出来るわけです。だから、大日女に当てた語は、同時に稚日女に当てた語というふうに言えるわけです。ともかくそれで目を廻された、あるいは死んでしまわれた、とも説明が出来ますが、普通の考えでは、それは、つまり魂が遊離するということは、すなわち、仮死の状態に陥ることです。その状態が長く続いて来れば、それで

死ということが定まるのですが、魂が遊離して、息が絶えて脈搏が止ってしまったと言っても、死んだのか生きているのか、昔の人には判断が出来なかつたのです。我々としても、現実に死んだ人を見た時に、生きているのか、死んでいるのかということは、判断が付きません。医者がいくら死んでしまったのだと言っても、横隔膜（ちゅうかくまく）の働きがまだある間は、確かに死んだとは、我々でも暫く（しばらく）は考えられません。昔の信仰では、単にそればかりでなく、事実時がたつて、死んだということを知っていても、信仰上では、死んだということを考えなかつたのです。何故かならば、死ということとは、人間がなくなるということの外（ほか）に、神聖な一つの資格が、言い換えればこの世における神聖な位置が、この世から絶対に無くなってしまふことになります。たとえば、ここにある社の神主があるとして、その人が病気で死んでしまつたと、こう思うことは、その社の神主の職が、その土地から永久に消え去つてしまふということになるのです。何故ならば、昔の人の考えでは、人間というものには第二で、その職すなわち、神聖な職業というものは何時までもずっと続いて居（おち）、その職のために人間が入り代り立ち代り出現すると考えたのです。だから人間の存在には、職だけはなくはならない、同時に職を保つて行くのは、入り代り立ち代り出てくる人なのであります。だから逆に、神聖な職業の方から言うとは、つまりその職業と人間とは並行して不滅であり、職のある限りはその人間も死なないものと見ています。だから職と人間と一つにして考えていることが多いが、実は人に交代が行われている

のです。

たとえば、武内宿禰たけのすねの長生きしたことは、古事記・日本紀その他昔の書物を見ましても、實際長生きしているように見えます。これを否定しようとして、いかに歴史的説明を行ったところで駄目なのです。何故かならば、それには死なないわけがあるのです。つまり、今申しましたように武内宿禰という人格はなくならないで、武内宿禰の人格を現すからで、すなわち、人は幾代でも替るわけなのです。もう一つ延長してその人格をいうと、神様に対する一つの関係が考えられます。それをもつと露骨に、殺風景にいうと、つまり一つの魂があつて、それが人の身体につくのです。すると、その魂につかれた人は、その魂そのものになつてしまうのです。あたらない例だが、ここにAという人がいて、武内宿禰という魂を持っているとすれば、Aが死ぬと、Bが武内宿禰という魂につかれる。さらにCにつく、こうして人間が幾代死に替わつても、武内宿禰という名前はなくならないのです。つまり、容れ物はなくなるが、中味はなくなるらないのです。こう考えると、容れ物は問題にならないために、何時までも武内宿禰の人格が続いていることになるのです。これは私の空想でも哲学でもありません。我々の神道の、外の宗旨と違っている所は、この非常に実証的に物が考えられていることなのです。ところが、中途から神道にも人物が現れて、物を非常に哲学的に考えるようになり、かえつて変な考え方が出て来たのです。だから我々としては、神道の今まで保たれて来た実証的態度を推し進めて